

各 位	2014年10月30日
	原爆文学研究会事務局
	〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1
	福岡大学人文学部 中野和典研究室内
	tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u. ac. jp

第46回 原爆文学研究会のご案内

時下益々ご清栄のことと存じます。第46回原爆文学研究会を下記の要領で開催いたします。皆さまには、ご多忙のことと存じますが、万障お繰り合わせの上お集まりくださいますようお願い申し上げます。

会場・資料の準備の都合もありますので、**参加をご希望の方は2014年12月14日(日)までに「研究会」「懇親会」のそれぞれについて参加／不参加を明記して事務局にeメールかお電話でお申し込みください。**

記	
○ 日時：2014年12月21日(日) 12:00～17:00	
○ 会場：九州大学西新プラザ大会議室(福岡市早良区西新2-16-23 TEL 092-831-8104)	
○ プログラム	
11:30 開場	
12:00 開会・自己紹介	
「戦後70年」連続ワークショップⅢ 古典詩と現代詩の協奏——実作者を迎えて	
12:15 司会者から	高野 吾朗
12:20 詩の朗読・全体討論	新井 高子・高野 吾朗
14:00 ワークショップⅢ終了・休憩	
「戦後70年」連続ワークショップⅣ ワークショップ カタストロフィと〈詩〉	
14:15 司会者から	野坂 昭雄
14:20 報告1 原民喜における詩と散文の往還 ——「永遠のみどり」論——	高橋 由貴
14:50 報告2 アウシュヴィッツとヒロシマ以後の詩の変貌 ——パウル・ツェランと原民喜を中心に——	柿木 伸之
15:20 報告3 3.11に向き合った詩人たち	中原 豊
15:50 休憩	
16:05 コメント	野坂 昭雄
16:15 全体討論	
17:00 ワークショップⅣ終了・事務局から	
17:30 懇親会 於「にいい! 朋友」(福岡市中央区六本松2-7-7 河津ビル1F TEL 092-731-8458)	

※「戦後70年」連続ワークショップは、科学研究費(基盤B)「核・原爆と表象／文学に関する総合的研究」(研究課題番号:26284038 代表:川口隆行)との共催事業になります。

※当日、2015年分研究会会費(3000円)を集めますので、会員の方はご準備ください。

※当日、10:00より同会場で世話人会を開催しますので、世話人の方はお集まりください。

【趣意文】「戦後70年」連続ワークショップⅢ 古典詩と現代詩の協奏——実作者を迎えて

原爆、原発、核問題、そして戦争。いまを生きる日本の詩人たちがこうしたテーマにいざ対峙しようとするとき、いったいそこからどのような詩が編まれうるのだろうか。その創作過程で、彼らが直面することになるであろう「困難」とは、はたしてどのようなものなのだろうか。また、そうした困難の数々は、一体いかなる結果を最終的にもたらしうるのだろうか。

今回のワークショップでは、原爆・原発・核問題・戦争といった諸問題を自らの詩の世界に投影させた経験を過去に持つ二人の詩人に、自作詩の朗読も交えながら、自らの創作過程の裏側を明かしてもらうことにする。またその際、自らの創作に少なからず影響を与えたと思われる先人たちの原爆詩や戦争詩をも、同時にいくつか紹介・朗読してもらう

ことにする。本人自身の詩作品と先人たちの詩作品との「協奏」に耳を傾けながら、「原爆文学研究」における詩のありように関して、さらに議論を深めていきたい。

このワークショップの企画者である高野は詩人でもあり、もっぱら英語のみで詩作を続けている。2013年に第一詩集 **Responsibilities of the Obsessed** をアメリカの **BlazeVOX** 社より出版し、現在、第二詩集の出版に向け創作活動中である。2012年にベトナム・ハノイにて開催された **Asian Poetry Festival** に、また、2014年にラトビア・リガにて開催された詩の祭典 **Poetry Days** に「海外からの招待詩人」の一人として出演した経歴を持つ。原爆や核問題に言及した作品もいくつか書いており、このワークショップでは司会者としてだけでなく、実作者のひとりとしても登壇する。

もうひとりの登壇者である新井高子氏は、1966年、群馬県桐生市出身。現在、埼玉大学国際交流センターで留学生に日本語・日本事情を教えている。第一詩集は『詩集 霸王別姫』(緑鯨社、1997年)。第二詩集の『タマシイ・ダンス』(未知谷、2007年)で、第四十一回小熊秀雄賞を受賞。その英訳版が **Soul Dance** (ミテ・プレス、2008年)である。最新作は第三詩集となる『ベットと織機』(未知谷、2013年)。詩と批評の雑誌『ミテ』の編集人も務めている。2006年、ニューヨーク開催「現代日本女性詩人の祭典」に出演。2008年、「東京ポエトリー・フェスティバル」実行委員。近年、福島原発事故に絡んだ作品などを発表しはじめている。

【趣意文】「戦後70年」連続ワークショップⅣ カタストロフィと〈詩〉

今回の「戦後70年」に向けた連続ワークショップでは、「カタストロフィと〈詩〉」と題して、原爆や核などの巨大な破局の表象に対して〈詩〉というジャンルが持ちうる可能性を考えてみたい。原爆文学研究会では、これまでも幾度か詩が取り上げられてきたが、限定された詩人、作品のみが考察の対象となっていた。ここでは〈詩〉をやや原理的に考察することによって、なぜ〈詩〉というジャンルが詩人によって選択されたのか、ということを議論したい。

本来〈詩〉とは、唯一の適切なる場所に言葉を配置することによって絶対的な安定性、完全性、美を体現するような文学ジャンルであったと考えられる。しかし、カタストロフィを描くということは、そうした安定性や美を否定し続けることに他ならない。そして、近代の小説が客観的な三人称の視点を作品内に実現しているのに比して、詩は言葉そのものへの着目を促し、読み手との間に不断の緊張関係を生み出す。そうすることで、既存の再現=表象システムを越えて、〈詩〉は戦後の空間にとりわけ批評的なジャンルとして屹立しえたのである。こうした、やや矛盾を孕んだ〈詩〉のありようを、実作者である詩人はどのように受け止めていたのか。カタストロフィを描く〈詩〉の位相を視座に、原爆や核、原発などのカタストロフィに直面した文学全般の問題を考える。

報告者は、異なる専門領域を持つ三名に依頼した。大江健三郎など現代小説を専門とする高橋由貴氏からは原民喜における詩と散文との関わりについて、中原中也をはじめとする近現代詩専門の中原豊氏からは3.11に反応した和合亮一、辺見庸、須藤洋平などの詩人について、またベンヤミンなどの言語哲学・思想を専門とする柿木伸之氏にはアウシュヴィッツとヒロシマとの関わりという観点から、それぞれ報告をしてもらう。その後の全体討議の中で、三者三様の論点

